従属接続詞 daß の起源について

斎　藤　治　之

ドイツ語の従属接続詞 daß に関しては，従来，この接続詞が起源的には指示代名詞の中性・単数・主対格形 das と同一のものであり，それが名詞文を導く接続詞へと移行したとする考え方が多くの文法書などにおいて説かれている。例えば Paul の Deutsche Grammatik[1]においては，joh gizalta in sâr thaz, thiu salida untar in uuas (Otfrid 2, 2, 8) “彼は彼らに次のことを直ちに告げた。祝福が彼らのもとにある。” を引用して，指示代名詞 thaz は上のような文においてはいまだ主文に属し，接続詞なしで論理的に前の文に従属している後の文 “thiu salida untar in uuas”を指し示しているにすぎず，このような thaz が歴史的に副文を導く接続詞へと移行したとしている。しかし，このような指示代名詞から接続詞への移行ではなく，関係代名詞の中性・単数・対格形 thaz から接続詞が成立したと考える方がよいと思われる場合がある。そこで，ここでは関係代名詞からの接続詞 daß の成立の可能性を指摘してみたい。

その前にまず，印欧語における指示代名詞と，それから生じた関係代名詞について調べ，その関係代名詞が接続詞としても用いられていることを見てみよう。

印欧語に属する諸言語の比較によって再建される承前(anaphoric)の指示代名詞[2]の語幹は，*yo-，*ei-／*i-，*so-／*to-である。これらの語幹の中で，*yo- は[サンスクリット語] yas, yā, yad,[ギリシア語] ος，η，ο，[古代教会スラヴ語] iže, jaže, ježe のように関係代名詞として用いられており，この用法は印欧基語の時代まで遡

ると考えられる。[3] この関係代名詞*yo-の中性・単数・対格形*yod は，ヴェーダ語 yad あるいはギリシア語の *o* から考えて，副文を導く接続詞としても用いられていた可能性がある。例えば，ヴェーダ語においては yad (<*yod)は接続詞として次のように用いられている。

1．名詞文

ninyā ciketa pṛśnir yad ūdho jabhāra (Rv. VII. 56_4)

彼は，プリシュニが蛇をもたらしたという秘密を知っている。

2．副詞文

(時)　aśvyo vāro abhavas tad indra sṛke yat tvā pratyahan…… (Rv. I. 32_{12})

(インドラよ，(ヴリトラが) 槍において汝に反撃を加えた時，汝は馬の尾の毛に姿を変えた。)

(条件)　bhūriṇi hi kṛṇavāmā śaviṣṭha indra kratvā maruto yad vaśāma (Rv. I. 165_7)

(最も力強いインドラよ，もし我々が賢慮をもって望むならば，我々は本当に多くのことをなすであろう，マルトらよ。)

(理由)　kim āga āsa varuṇa jyeṣṭham yat stotāram jighāṃsasi sakhāyam (Rv. VII. 86_4)

(ヴァルナよ，何が最も大きな罪であったのか，というのは汝は友である崇拝者を殺そうと望んでいるのだから。)

(目的)　priyā vo nāma huve turāṇām ā yat tṛpan maruto vāvaśānāh (Rv. VII. 56_{10})

(マルトらよ，私は（賞賛を）望んでいる者たちが喜ぶように，汝ら力強き者たちの愛すべき名を呼ぶ。)

この接続詞としても用いられる*yad の起源は指示代名詞であるが，印欧語には，疑問代名詞の語幹*k^wi-／*k^wo-から生じた関係代名詞も存在する。(例，

ラテン語 quī, quae, quod, ヒッタイト語 kuis, kuit) Szemerényi は，*yo-, *kʷi-／*kʷo-に関して，後者の語幹から派生した*kʷe（ギリシア語 τε，サンスクリット語 ca）という小辞が，印欧諸語において，*pətēr *mātēr kʷe "父および母" という具合に現われるという事実に着目して，*kʷi-／*kʷo-の関係代名詞としての用法を印欧基語の時代に遡るものとしている。[4] 一方，*yo-については，ヒッタイト語の ya が*yo-から派生したとしても，ya は承前的な機能をもたず，また，ゴート語の jabai の場合も同様であるという考えから，*yo-の関係代名詞としての用法は Satem 語群とギリシア語において初めて生じたものであるとしている。[5] しかし，ヒッタイト語の

karū 30 GUD^{HLA} peškir kinuna GUD^{HLA} pāi[6]

（以前は，人は30匹の牛を与えていたが，今は，しかし，15匹の牛を与える。）

のような文においては，(y)a は明らかに承前的な機能を有しており，また，例えばスラヴ語においては，古代教会スラヴ語に現われる ize という関係代名詞は，現代語において，*kʷi-／*kʷo-による疑問代名詞によっておき代えられるという現象が存在している。（例，ブルガリア語 kójto，ロシア語 kotóryj，ポーランド語 który） また，承前的な指示代名詞はすべて関係代名詞になる可能性はあるが，それらがすべて関係代名詞であったとは限らないのと同様，*kʷe という小辞が印欧諸語に存在するという理由で，*kʷi／*kʷo-が印欧基語においてすでに関係代名詞であったと考えるのは正しくないであろう。これらのことから，印欧基語の時代には*kʷi-／kʷo-は関係代名詞の機能をもたず，一方，*yo-は Satem 語群と Centum 語群の両方において現われることから，むしろ，*yo-が印欧基語の時代まで遡ると考える方が正しいと思われる。

また，Hirt は，すべての承前的な指示代名詞は関係代名詞として機能していたという考えから，上述の二つの語幹の他に，さらに*ei-／*i-，*so-／*to-も印欧基語において関係代名詞であったとしているが，[7] この考えは諸語の比較から考えて不可能であると思われる。

上述の承前的な指示代名詞の中で，ゲルマン語において重要なものは *ei-／*i-，*so-／*to-の二つである。まず*ei-／*i-であるが，これはゴート語 ei，古代アイスランド語 er, (es)の語幹として現われている。ゴート語の ei は，起源的には指示代名詞語幹*e-[8]の locative であり，以下のように用いられている。

1．形容詞文

sijais þahands jah ni magands rodjan und þana dag ei wairþai þata (L. 1, 20)

（あなたは，そのことが成就する日まで，黙り，ものを言うことができないでしょう。）

2．名詞文

ni hugjais ei qemjau gatairan witoþ…(M. 5, 17)

（私が律法を廃するために来たと思ってはならない。）

3．副詞文

（目的）　jah gahabaidedun ina, ei ni afliþi fairra im. (L. 4, 42)

（彼らは，自分たちから離れて行かないように，彼を引き止めた。）

（結果）　hvas frawaurhta, …ei blinds gabaurans warþ? (Joh. 9, 2)

（（この人が）盲人として生まれたのは，誰が罪を犯したからですか?）

次に，古代アイスランド語 er, (es)であるが，これは語幹*ei-／*i-の男性・単数・主格形*is[9]（＝ゴート語 is，古高ドイツ語 er）が固定したものがその起源であり，ゴート語 ei と同様，種々の副文を導く接続詞となっている。

1．形容詞文

hinn er sæll er sér um getr lof ok līknstafi (Hávamál 8)

（自分のものとして，賞賛と良い評判を獲得する者は幸せである。）

2．名詞文

Hrólfr krake sá, er hann laut niþr.[10]

（フローヴ・クラキは彼（アジルス）が身をかがめるのを見た。）

3．副詞文

（時）　En er Haraldr inn hárfagri var konungr í Nóregi, þá byggðisk Ísland. (Ynglingasaga. Prolog.)

（ハラルド美髪王がノルウェーの王であった時，アイスランドの植民が行われた。）

（理由）　lát suá vera, er alt er á þínom dóme.
（すべてはおまえの判断にかかっているのだから，そのままにしておきなさい。）

さて，*so-／*to-という語幹からは，主に西ゲルマン諸語において種々の副文を導くために用いられる*þat（古高ドイツ語 thaz，古代英語 þæt）という接続詞が造られる。例えば，古高ドイツ語の thaz は，関係代名詞の他に，以下のような副文を導くために用いられている。

1．名詞文

Ih quidu íu, thaz manage óstana inti uuestana quement ･･･ (Tatian 47, 7)
（多くの人々が東から，西から来るのであろうということを私はあなた方に言う。）

2．副詞文

（理由）　uuaz tuon, thaz ih ni haben uuara ih gisamano mine uuahsmon? (Tatian. 105, 2.)
（どうしようか?というのは，私には自分の作物を集めておく所がないのだから。）

（目的）　Ín bihieltun thó thie scribara inti thie Pharisei, … thaz sie fundin zi ruogenne inan (Tatian 69, 2)
（律法学者とパリサイ人たちは訴える口実を見つけるために彼をうかがっていた。）

（結果）　Inti in thesen allen untar íú inti untar uns michil untarmerchi gifestinot ist, thaz thie thar uuolent hinan faran zi íú ni mugun, (Tatian 107, 3)

（そればかりでなく，あなた方と私たちの間には大きな裂け目があり，ここからあなた方の所へ渡ることを望む者は，それをすることができない。）

上述したように，接続詞 thaz の起源については，並列的に置かれた二つの文のうち，最初の文に属する中性・単数の指示代名詞が後の文全体を受け，それが接続詞へと発達したと説明されるのが普通である。しかし，ゲルマン語以外の他の印欧諸語における接続詞の発達を眺めてみた場合，やはり，関係代名詞からの接続詞 thaz の発達の可能性も，以下に述べる理由から無視することができないと考えられる。

例えば，thaz は理由文を導く接続詞として用いられるが，この用法については，その起源に関して様々な説明がなされている。Paul は，主文に属する bithiu のような副詞に連係する thaz 文から，理由文を導く thaz が発達したと考え，[11] また Behaghel は，主文に属する thes という属格の指示代名詞に連係する thaz 文に thaz の起源を求めている。[13] しかし，Paul の場合，bithiu のような副詞は

Ascendit autem et Ioseph … in civitatem David, … eo quod esset de domo et familia David, (L. 2, 4)

Fuor thô Ioseph … in Dauides burg, … bithiu uuanta her uuas fon huse inti fon hiuuiske Dauides (Tatian 5, 12)

（ヨセフも，ダビデの家系であり，その血統であったので，…ダビデの町へ上って行った。）

のように，ラテン語の eo の翻訳に用いられており，副詞と接続詞の結合はラテン語からの翻訳借用の可能性も考えられる。[13] そこで，Paul の言うように，bithiu … thaz のような形式を，理由文を導く thaz の起源と考えることは妥当ではないと思われる。また，Behaghel の場合，Heliand における理由文の接続詞が thaz の代わりに thes であるという理由から，*thes thaz という形式を，thaz の起源として想定しているが，他の言語から考えて，これも妥当ではないと思われる。このように，理由文を導く thaz の起源に関しては，他の説明がなされなければならないであろう。

さて，例えばラテン語には次のような文が存在する。

quod male feci, crucior. (Plautus)[14]

（私は，自分が悪い事をしたことについて，悲しんでいる。）

このような文の場合，関係代名詞の中性・対格である quod は，本来は副文における目的語であった。このことは，次のような文

quod scribis de reconciliata nostra gratia, non intellego, cur reconciliatam esse dicas, quae nunquam imminuta est. (Cicero)[15]

（君が和解された我々の友情について書いていることについて，なぜ君が決して減ることのなかった友情が，和解されたと言っているのか私にはわからない。）

において，scribis が quod を支配していることからも明らかである。そして，そのような quod が，歴史的に内的目的語[16]となり，“～ということについて”という副詞的意味を有するようになった。quod はさらに“～ゆえに”という意味を発達させ，ここに理由を表わす接続詞 quod が成立する。そこで，上の qoud male feci, crucior における quod は，理由文を導く接続詞に至る段階にあると言える。また，知覚や陳述を表わす動詞の後に来る quod から，名詞文を導く quod も成立することになる。

また，ギリシア語においても，*Τηλέμαχον θαύμαζον ο θαρσαλέως α'γόρευεν*，(*α*382)（彼らはテレマコスが大胆に語ったので驚いた。）のように，関係代名詞の中性・単数・対格形 ὅ が理由文を導く接続詞として用いられている。

このように見てくるならば，接続詞 thaz に関しても，関係代名詞の中性・単数・対格形 thaz の副文における内的目的語から理由文・名詞文を導く接続詞への発達[17]という解釈が可能であり，また，理由文を導く thaz の成立を最もよく説明できると思う。

最後に問題となるのは，thaz がどの時代に接続詞となったかということである。上述したように，印欧基語の時代まで遡る関係代名詞の語幹は*yo-のみであり，*so-／*to-の関係代名詞化をゲルマン基語以前に遡らせることは不可能で

ある。それでは，ゲルマン語の内部においてはどうであろうか。西ゲルマン語以外の言語，例えば，ゴート語，古代アイスランド語においては，それぞれ[ゴート語] saei, soei, þatei, [古代アイスランド語] sá er, sú er, þat er という関係代名詞が存在する。これらの中で，ゴート語の関係代名詞 saei, soei, þatei は構造的に，thie thar minnot sinan fater inti muoter mér thanne míh, nist hér mín uuirdig (Tatian, 44. 23) (私よりも父や母を愛する者は，私にふさわしくない。) という文に見られる[古高ドイツ語] ther thar, thiu thar, thaz thar に対応するものである。そして，ther thar の thar という要素が西ゲルマン語における独自の発達であると同様，ゴート語の saei の ei もゴート語における独自の発達であると考えることができる。そこで，場所的な意味を表わす要素“ei, thar”を除いた“sa, ther”は，ゲルマン基語の時代にすでに関係代名詞として用いられていた可能性がある。ここで問題となるのは，ゴート語においては sa という形のみでは関係代名詞として用いられないということである。しかし，-ei の付加は，例えば，中世英語の whan that, if that のように，副文を導くことをはっきりと明示し，また，形態的に等しい指示代名詞と関係代名詞を区別するためであると考えられる。また，*so-／*to-から作られた þei (<*tei, locative)が“þatahvah þei wileiþ bidjaiþ (Joh. 15, 7)，（あなたが望むものを命じなさい）”のように関係代名詞的に用いられていることも，この*so-／*to-という語幹の関係代名詞としての使用の古さを示している。このようにして，従属接続詞 thaz は，ゴート語の þatei などから考えて，ゲルマン基語の時代に成立していたと考えられる。

〔注〕

1) Paul, Hermann : Deutsche Grammatik, Bd. 4., Halle 1959, p. 241.

2) 指示代名詞が文脈において，前にすでに言われた部分を指し示す場合，そのような指示代名詞を承前の指示代名詞といい，歴史的にはこの承前の指示代名詞から関係代名詞が成立する。

3) 高津春繁：印欧語比較文法，東京 1971，p. 337.

4) Szémerenyi, Oswald : Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft, Darmstadt 1970, p. 194.

5) ibid., p. 194.

6) Friedrich, Johannes : Hethitisches Elementarbuch. I., Heidelberg 1940, p. 88.

7) Hirt, Hermann : Indogermanische Grammatik Teil VII., Heidelberg 1932, p. 133.

8) *ei-／*i-の変化表には，さらに*e-という語幹が入りこんでいる。例えば，ゴート語の男性・単数においては，属格 is，与格 imma の語幹は*e-である。

9) de Vries, Jan : Altnordisches etymologisches Wörterbuch, Leiden 1977, p. 105.

10) Heusler, Andreas : Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg 1932, p. 156.
理由文も同様。

11) Paul, Hermann : ibid., p. 243.

12) Behaghel, Otto : Deutsche Syntax III., Heidelberg 1928, p. 139.

13) 例えば Tatian においては，eo quod が現われる場合，常に bithiu が接続詞とともに翻訳に用いられている。
また，ラテン語においても，主文に属する相関句としての ex eo, de eo, praeter eo のような要素は，理由文を導く quod の意味をよりはっきりと示すために，後になってつけ加えられたものである。

14) Leumann, Manu／Hofmann, J. B.／Szantyr, Anton : Lateinische Grammatik II., München 1963, p. 574.

15) Kühner, Raphael／Stegmann, Carl : Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache, 4. Aufl., München 1962.

16) 内的目的語とは，この用法の盛んなギリシア語を例にとれば，*νίκην νικᾶν* "勝利を勝利する"のように，動詞と同じ語幹による名詞を動詞に並べたものである。内的目的語としてはさらに，それを修飾する形容詞が名詞から独立して用いられ（例，*ἡδὺν γέλωτα γελᾶν* "甘美な笑を笑うこと。→ *ἡδὺ γελᾶν* "甘美に笑うこと"），また，代名詞の対格が独立して副詞的に用いられることもあった。（例，*τί κλαίεις* "何を泣いているのか？" → "なぜ

泣いているのか？")

高津春繁：ギリシア語文法，東京 1971，p.255.

このように，代名詞などが"なぜ"という副詞的な意味において用いられるのは，内的目的語が動詞によって表わされる動作を結果的に限定するものであり，本来は動詞が自動詞として目的語を伴わずに用いられることも可能だからである。そこで，動詞と目的語の間の関係は密接ではなく，目的語が独立して"～に関して"というような意味を表わすようになる。また，古高ドイツ語の thaz に関しては，ni…wiht のような内的目的語から成立した語との関連において，すでに，副文における内的目的語からの成立に関する可能性が指摘されている。

Erdmann, Oskar : Über got. ei und ahd. thaz, Zeitschrift für deutsche Philologie 9, pp. 47-48.

17) ラテン語においては，名詞文を導く quod は古典期以後の発達であり，Vulgata などにおいて，不定詞を伴った対格にとって代わるようになった。しかし，発達が遅れたのは，不定詞を伴った対格の用法が盛んであったからであると考えることも可能であり，このような不定詞を伴った対格の用法があまり発達していなかったゲルマン語においては，名詞文を導く接続詞の成立はよりすみやかに行なわれたと思われる。

〔参考文献〕

Behaghel, Otto : Deutsche Syntax III., Heidelberg 1928.

Erdmann, Oskar : Über got. ei und ahd. thaz, Zeitschrift für deutsche Philologie 9.

Friedrich, Johannes : Hethitisches Elementarbuch I., Heidelberg 1940.

Heusler, Andreas : Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg 1932.

Hirt, Hermann : Indogermanische Grammatik Teil VII., Heidelberg 1932.

高津春繁：—ギリシア語文法，東京 1971。

—印欧語比較文法，東京 1971。

Kühner, Raphael／Stegmann, Carl : Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache, 4. Aufl., München 1962.

Lanman, Charles Rockwell : A Sanskrit Reader, Massachusetts 1971.

Leumann, Manu／Hofmann, J. B. ／Szantyr, Anton : Lateinische Grammatik II., München 1963.

Paul, Hermann : Deutsche Grammatik, Bd. 4., Halle 1959.

Sievers, Eduard : Tatian, Paderborn 1960.

Szémerenyi, Oswald : Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft, Darmstadt 1970.

de Vries, Jan : Altnordisches etymologisches Wörterbuch, Leiden 1977.